

OfByForコラム 地域の 地域による 地域のための Something NEWS

第38回

秋田が先導するエコノロジー

——『真夏の夜の夢』の妖精はだれ？

一般社団法人 洸楓座
一般社団法人 e f c o . j p

代表理事 佐藤建吉

▼秋田訪問

近年、秋田県に縁がある。数年前にも夏に東北6県をドライブしたおり、十和田湖から小坂鉾山、能代市、秋田市、由利本荘市などを訪ねた。昨年は、大館市と角館市を、今年は男鹿市と大館市を訪ねた。

▼観光と「エコノロジー」

6月30日、朝、滞在先の軽井沢駅を10時32分の新幹線で、大宮経由で秋田に向かった。秋田行き「こまち19号」は満席、仙台までは立席。仙台からは着座でき、牛タン弁当で昼食とした。盛岡を経由し、15時04分に少し遅れ、秋田駅に到着した。

写真2：赤・青色の蓄電池駆動電車ACCUM



地元の男女12名の若い演奏家集団「恩荷」が研鑽を重ねて演舞している様子は、一時の感動を与えてくれる。「恩荷」(おんろじ)は、蝦夷の酋長の名であって、男鹿の地名の由来でもあるという。若者たちは、この名を頂き、男鹿に生まれたことに「恩返し」することを「荷」と背負い、地元の伝統芸能を通じ観光の一端を担っている。彼ら彼女らの演舞やトークには、その思いや行動が感じられる。真夏の夜に、清々しさを頂くことができた。応援したい。

今年6月30日に男鹿半島に宿泊した。その当日と翌日7月1日の体験を、OfByForの視点として報告したい。

秋田駅で16時28分の男鹿行き乗車予定が、駅ナカショップの出店者と話し込み乗り遅れてしまった。次の列車で男鹿駅に17時48分に到着できた。総距離788キロの鉄道の旅であった。

筆者は「エコノロジーアム」という観光を楽しむ地域環境整備に関わっていたが、駅で観光案内所の人とそれには無縁で、裏腹のようである。

「エコノロジー」という言葉が「恩返し」することを「荷」と背負い、地元の伝統芸能を通じ観光の一端を担っている。彼ら彼女らの演舞やトークには、その思いや行動が感じられる。真夏の夜に、清々しさを頂くことができた。応援したい。

「蓄電池駆動電車」は、JR東日本が開発した新型車両。交流蓄電池電車「EV E801系」の赤・青色のボディカラーの2両が1編成となっている。【写真2】

蓄電池には、リチウムイオン電池を搭載、追分駅〜男鹿駅の間(羽越線)では、架線からの電力で走行するハイブリッド(男鹿線、26・6キロ)を「蓄電池駆動電車」として走行する。秋田駅〜追分駅の電化区間(羽越線)では、架線からの電力で走行するハイブリッド

この時季、日中は猛暑・酷暑、夜も熱帯夜など、暑や熱の漢字が飛び交う。シエイクスピアの喜劇『真夏の夜の夢』を思い出す。2組の男女の恋愛の悩みや軋轢を一夜にして解決する妖精が登場する。

まだまだ明るい。が、宿泊先の温泉ホテルの迎えサービスは、もうないという。公共のバスもなく、唯一の交通手段はタクシー、それはタクシ、それも30分は待たなければならぬという。ホテルまでは25分、料金が7000円近くもかかる。男鹿半島観光に予定変更は要注意と教えられた。

まだまだ明るい。が、宿泊先の温泉ホテルの迎えサービスは、もうないという。公共のバスもなく、唯一の交通手段はタクシー、それも30分は待たなければならぬという。ホテルまでは25分、料金が7000円近くもかかる。男鹿半島観光に予定変更は要注意と教えられた。

男鹿温泉ホテルに宿泊したが、日本海と寒風山を眺望できる客室や展望風呂は、気持ちを癒してくれる。夕食では、男鹿の食味、そして酒膳を頂いた。

その後、近くの羽立駅までは地元のケーブルに送って頂いた。駅で待っている、男鹿線での「エコノロジー」の表象ともいえる「蓄電池駆動電車ACCUM」が入線してきた。行先が男鹿行きで逆ではあるが乗車。車内がえらく混んでいる。

「蓄電池駆動電車」は、JR東日本が開発した新型車両。交流蓄電池電車「EV E801系」の赤・青色のボディカラーの2両が1編成となっている。【写真2】

蓄電池には、リチウムイオン電池を搭載、追分駅〜男鹿駅の間(羽越線)では、架線からの電力で走行するハイブリッド(男鹿線、26・6キロ)を「蓄電池駆動電車」として走行する。秋田駅〜追分駅の電化区間(羽越線)では、架線からの電力で走行するハイブリッド

この時季、日中は猛暑・酷暑、夜も熱帯夜など、暑や熱の漢字が飛び交う。シエイクスピアの喜劇『真夏の夜の夢』を思い出す。2組の男女の恋愛の悩みや軋轢を一夜にして解決する妖精が登場する。

写真1：「恩荷」の熱い太鼓演奏



まだまだ明るい。が、宿泊先の温泉ホテルの迎えサービスは、もうないという。公共のバスもなく、唯一の交通手段はタクシー、それも30分は待たなければならぬという。ホテルまでは25分、料金が7000円近くもかかる。男鹿半島観光に予定変更は要注意と教えられた。

写真3：ACCUMの充電に活躍するゼファー風車



その後、近くの羽立駅までは地元のケーブルに送って頂いた。駅で待っている、男鹿線での「エコノロジー」の表象ともいえる「蓄電池駆動電車ACCUM」が入線してきた。行先が男鹿行きで逆ではあるが乗車。車内がえらく混んでいる。

「蓄電池駆動電車」は、JR東日本が開発した新型車両。交流蓄電池電車「EV E801系」の赤・青色のボディカラーの2両が1編成となっている。【写真2】

蓄電池には、リチウムイオン電池を搭載、追分駅〜男鹿駅の間(羽越線)では、架線からの電力で走行するハイブリッド(男鹿線、26・6キロ)を「蓄電池駆動電車」として走行する。秋田駅〜追分駅の電化区間(羽越線)では、架線からの電力で走行するハイブリッド

この時季、日中は猛暑・酷暑、夜も熱帯夜など、暑や熱の漢字が飛び交う。シエイクスピアの喜劇『真夏の夜の夢』を思い出す。2組の男女の恋愛の悩みや軋轢を一夜にして解決する妖精が登場する。

連載・イベント